

# 生徒に興味をもたせ学習に向かわせる，効果的な指導の在り方

—小・中学校での実践を活かして—

M14EP001

上杉 尚子

## 1. はじめに

2008（平成 21）年 3 月告示の『高等学校学習指導要領』には、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」とある。今まで行われてきた、いわば「知識の注入」といった形の教育活動ではなく、生徒が興味をもって、主体的に学べる環境を整えよ、ということが謳われるようになったのである。

ところが、現場での実態は上記のこととは程遠い。「学ぶ意欲の欠如」というよりも、すでにあきらめてしまったかのような態度で 50 分間を、まさに「耐えている」といった生徒が増加する一方である。昨今叫ばれるようになった「発達障害」や「学習障害」等、様々な要因から、授業に参加できない生徒が存在するようになったのも事実だ。筆者自身を考へても、「わかりやすい授業」を意識してはいるものの、いわゆる「講義」形式の、「一方通行」的な授業が中心になってしまっている。本当にこのままでよいのか。生徒たちが「学ぶ楽しさ」を味わえないまま、高校生活を送ってしまってもよいものだろうか。と疑問をもつようになった。

## 2. 研究の目的

2014（平成 26）年 12 月に、中央教育審議会から「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体化改革について」の答申（以

下、中教審答申）がなされた。その中に、「小・中学校において学力の三要素を踏まえた教育が定着してきている」とあり、その背景として小・中学校では、思考力・判断力・表現力等の能力や学習意欲を育むための具体的な取り組みがなされているということ、よく耳にする。そこで、「授業づくり」については、小・中学校での授業参観や授業実践を実際に体験することや、高校ではまだ十分とは言えない、「特別支援教育」的視点から行われる教育実践を観察することなどから、生徒の興味・関心を引き出し、学ぶ意欲を駆り立てるためのヒントを得たい。「授業外」での働きかけについては、小・中学校で『復習ノート』や『自主学习ノート』など、子どもの学力向上や学習意欲喚起のための諸方策が実践されている。そこで、これに類するものを使って、中学生との「やりとり」を実践し、筆者の指導力向上に役立てたい。

以上 2 点について、2 年間の研究期間を見通す中で、1 年目に当たる今年度は、筆者には経験のない小・中学校での実習から、子どもたちの興味・関心を引き出し、学ぶ意欲を駆り立てるための、有効な方策を探ることを目的として、研究を行うこととした。

## 3. 研究の内容

- (1) 子どもに興味をもたせ、学習に向かわせるための効果的な指導の在り方について（以下、「授業づくり」と記す。）
- (2) 『学習振り返りノート』を活用した、学習意欲喚起のための手立てについて（以下、『振り返りノート』と記す。）

## 4, 研究の方法

### (1)実習校と実習方法

- ①実習校 : 山梨県内公立 A 中学校  
および B 小学校
- ②実習期間 : 平成 26 年 5 月～9 月中旬  
・・・A 中学校  
平成 26 年 9 月中旬～12 月  
・・・B 小学校
- ③観察実習 : A 中学校 3 年 A 組, B 組  
B 小学校 5 学年, 1～4・  
6 学年 (国語, 道徳), 特別支  
援学級
- ④授業実践 : 国語 (古典), 総合的な学習の  
時間, 道徳

### (2)研究の方法

#### ①「授業づくり」について

研究の目的に掲げた、「生徒の学ぶ意欲を駆り立てる授業」のポイントは、まずは「わかる」授業だと考える。そこで、授業を「ユニバーサルデザイン (以下, UD) 化」という発想が浮かんだ。桂(2012)は、「国語授業のユニバーサルデザインとは、「理解」レベルの方法論である。気になる A さんを想定したユニバーサルデザイン的な「指導の工夫」やバリアフリー的な「個別の配慮」によって、全員が楽しく「わかる・できる」「理解」レベルの国語授業をつくる, ということである。」と述べている。また、授業の UD 化を目指す指導の工夫として、「論理的な話し方・聞き方・書き方・読み方」を目標にすることと、次の 3 つの要件をふまえて授業をデザインすると言っている。その 3 点とは、

- ア 授業を焦点化 (シンプルに) する
- イ 授業を視覚化 (ビジュアルに) する
- ウ 授業で共有化 (シェア) する

である。そこで、この 3 観点を常に意識し、授業観察を行った。その中で、

- 1) UD の考え方に基づいた, 小・中学校での取り組みの観察
- 2) 授業観察から得た知見をもとにした,

UD を意識した小・中学校での授業実践の 2 点に重点を置いて、研究を行った。

#### ②『振り返りノート』について

『自主学习ノートへの挑戦 自ら学ぶ力を育てるために』(堀・仙洞田・芦澤(2014)) の中で取り組まれた先行研究で、児童生徒が自主的に学習する意欲を喚起するためには、「自主学习ノート」での、子どもたちとの毎日の取組が有効であると報告されている。今年度は、実習という限られた時間ということもあり、試行的に『振り返りノート』というものを作成し、A 中学校で実践する。生徒との実際のやりとりを通じて、生徒の変容を見取り、本研究の目的に近付く手立てとなるかどうかを探ってみることとした。

- 1) A 中学校 3 年生, 47 名全員を対象に、『振り返りノート』を実施。前期は毎週火曜日, 後期は木曜日に実施。「今日一番がんばれた授業」と「がんばれなかった授業」の科目名とその理由、「何でもコーナー」には、日頃の悩みや (教師に対する) 質問などを自由に記入してもらう。日常の生徒の様子, ノートの記述などを見てコメントし, そのやりとりの中で生徒の変容・様子を観察する。
- 2) 観察を通じて、生徒の意欲を喚起するために効果的なコメントの在り方について研究を深める。

## 5, 研究の結果と考察

### (1)UD の視点に基づく授業観察から

小・中学校での授業観察から得られたものを、授業の UD 化における 3 観点ごとにまとめてみたい。

#### ア 授業の「焦点化」のポイント

- \* 「問い」を立てる
- \* 「ねらい」をはっきりさせる
- \* 板書の構成 (構造化)

主に、「発問・ことば掛け」に関する要素が挙げられる。本時に何をやり、何を考えれば

よいか明示される。そのために、

\*指示や説明を最低3回は繰り返す  
というのも、焦点化をねらうための一つの仕掛けと考えられる。

#### イ 授業の「視覚化」のポイント

- \*適切な文字の大きさ
- \*板書の仕方、ノートを取り方等のパターン化
- \*板書の構造化（色の使い方）
- \*ワークシートの構成
- \*興味・関心を持続させるために、より身近なものでの例示

主に、「黒板（板書）と生徒の机回り」に関する要素が挙げられる。非常に整理されており、できるだけ必要な情報だけを“見せる”工夫が為されている。子どもたちの視覚に訴えるための工夫に、労を惜しまない姿勢が見て取れた。また、道徳の授業で使用される、自己の相対する気持ちを2色のカードで表す“心のカード”も、自他の考えを「視覚化」するという働きをもち合わせたものといえるだろう。

#### ウ 授業の「共有化」のポイント

- \*グループ（班）での話し合い活動 → グループでまとめ・発表
- \*付箋の活用
- \*“心のカード”
- \*子どもが“先生”役になる
- \*子ども自身に自分の考えを板書させる

「共有化」に関しては、何より「子どもたちの「活動」を取り入れたスタイルの授業」ということに尽きる。子どもたちを積極的に授業に参加させるため、自分で考え、その考えの交流（つまり、共有）を図るための仕掛けが、いくつも見られた。あくまでも子どもたちの「声」を拾い、それをきっかけに考えを深めていく。筆者がもつ高校現場での授業のイメージには、ほとんどないものばかりだ。小・中学校の現場ではすでに定着しているスタイルなのだと実感した。

以上、授業のUD化に必要な3観点を中心にまとめてみたが、これらを成立させるために、「人の話を聞く時やノートを取る時の姿勢」等、学習規律がとにかく徹底されていることや、黒板周りの掲示物が必要最低限に抑えられていたり、戸棚にカーテンが引かれていたり、子どもたちの視覚刺激になるようなものを排除するなど、高校現場ではまず見ることができないような工夫もあった。また、ていねいに、何度でも、粘り強く。その子に合った方法を探りながら、学びを進めていく、特別支援学級の様子も印象的であった。

#### (2)UD化を意識した授業実践から

上記授業観察から得た知見を取り入れ、実習校において授業実践を行った。

まずは、A中学校において、3年生を対象とした「総合的な学習の時間」で、進路学習の授業を行った。中学生相手ということもあり、話すスピードや板書の文字の大きさ、情報量の精選などによりかなり気を使ったつもりであった。しかし、スピードが速すぎ、説明しがち、つまり筆者が話し過ぎてしまった点や指示の出し方・使うことばの難易度の点等の反省があった。授業後の生徒の感想でも、「説明の時に、例を示してくれるともっとわかりやすい」、「切り替えが早すぎて、途中で着いていけなくなった」といった声が挙がった。

このような点をふまえ、次に古典の授業で、3年生の2クラスに3時間ずつ、計6時間をいただいて授業実践を行った。私たちが知っている『浦島太郎』と、『御伽草紙』に伝わる昔の『浦島太郎』とでは、一部話が違っている。その違いがどのように違っているのかを比べ、最後に昔の『浦島太郎』の主題を探る、という授業内容を設定した。授業のUD化を目指すための3つの要件のうち、「焦点化」・「視覚化」に関しては、発問の仕方やワークシートの工夫（図1、2参照）、板書の構成などを意識した。

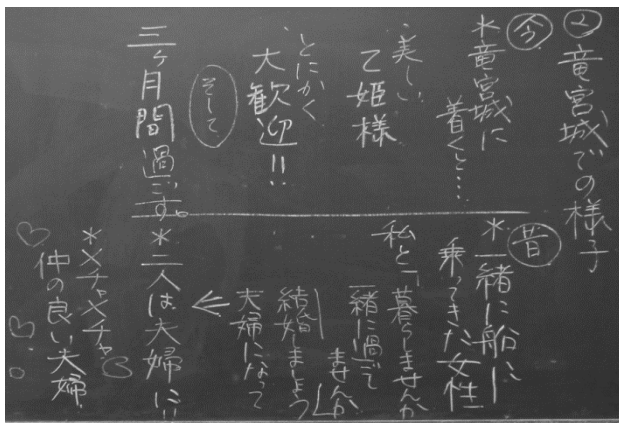


図1：『浦島太郎』授業・2時間目板書（一部）

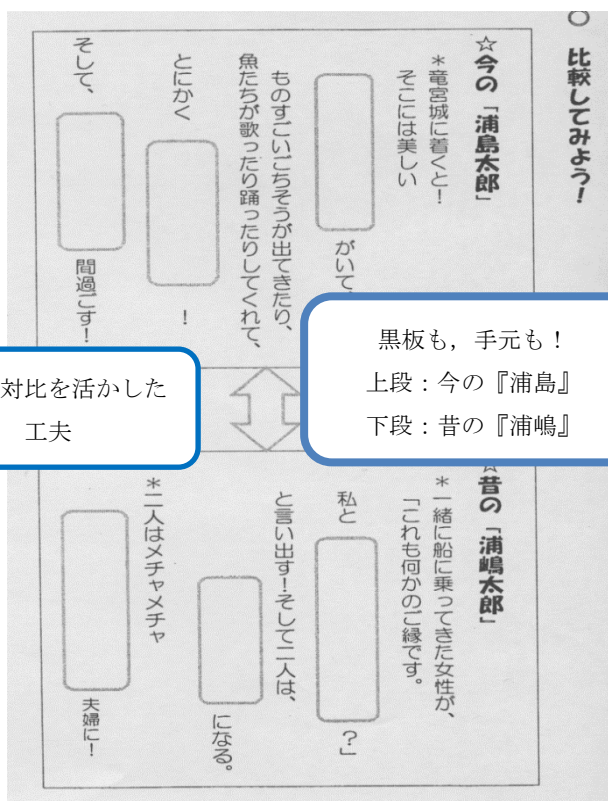


図2：『浦島太郎』授業・2時間目で使用のワークシート

生徒たちからは、「わかりやすかった。」「（黒板が）見やすかった。」等の感想をもらい、彼らの理解に結びつくものとなり、概ね良好だったように思う。しかし、筆者の課題は「共有化」にあり、各クラス3時間目には「話し合い活動」を取り入れてみたが、なかなか上手くいかなかった。生徒たち自身に、

意見の交流をさせたいがための「話し合い」活動であったはずなのに、後にビデオで確認すると、圧倒的に、授業者である筆者の話している時間が長い。また、「話し合い」をスムーズに進行させるための発問の仕方や個人での作業時間を見越したグループ活動の時間配分、「ねらい」に即した活動内容の取り入れ方等、多くの課題が残った。しかし、筆者の授業スタイルの改善には、大きな手応えを感じられる実践となった。

さらにB小学校においては、5年生において2時間。「道徳」の授業で、指導教員とのチーム・ティーチングを実践した。A中学校での実践で課題となった「共有化」の観点の意識の強化と、さらなる「視覚化」追求のための、「板書の構造化」に焦点を当てての実践となった。小学生が相手ということで、発問時に使うことばやスピード、子どもの声を拾って授業を展開することをより意識し、授業を行った。ビデオで振り返った結果、子どもたちとの「やりとり」が活発になった。1時間目には「1問1答」形式になりがちだったが、2時間目には、「それはどういうこと?」とか、「この考えについてはどう?」といったように、一つの答えを広げようとする発問が見られるようになった。また、「心のカード」などの「ツール」を使うことで、一人一人の考え・意見をより「共有化」できるという実感をもった。板書についても、これまでの「川流れ式」の形だけではない、より構造化された形（図3参照）を学ぶ機会となった。

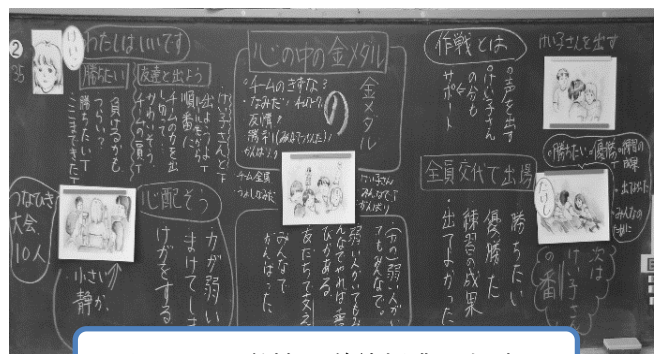


図3：小学校・道徳授業の板書

### (3) 『振り返りノート』の実際

半年間にわたる生徒たちの記述から、特徴的な次の三つのパターンを分類してみる。

#### ①「何でもコーナー」でのやりとりが続く生徒

次の図4は、毎週必ず「何でもコーナー」に記述があり、筆者がそれに反応するコメントを付けると、翌週はさらに付箋を使ってまでそのコメントに応える記述を返してくれた生徒の例。図5は、いったん「何でもコーナー」の記述が途絶えたが、ある時から再び記述がされるようになった生徒の記述例である。紙面の関係上、2名の例に留めておくが、他にも何人か、記述内容が豊富な生徒が見られた。担任の先生の話から、これら生徒の共通点は、「成績が上がり始めたころから記述が豊富になっている」ということ。また、筆者も生徒たちの気持ちに共感するようなコメントを心がけた結果、さらにやり取りが盛んになり、記述も前向きに、充実してきたように見て取れる。また、自身が抱える悩みを「何でもコーナー」に吐露できるようになって、日常の表情が柔らかく、穏やかになった生徒もいた。

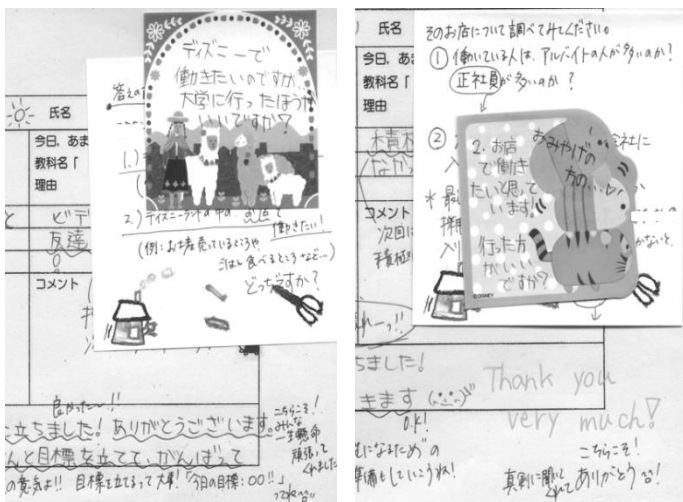


図4：付箋でのやりとりが続く生徒の記述

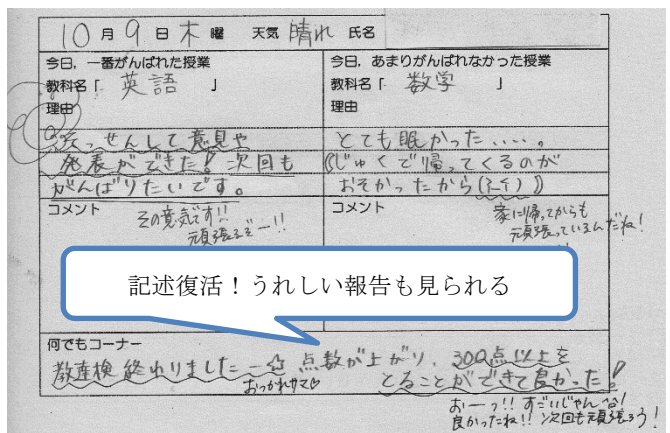
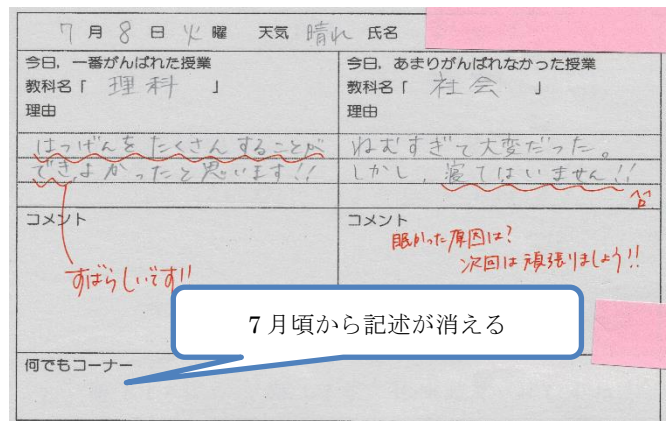


図5：「何でもコーナー」の記述が復活した生徒の記述

#### ②正直に「わからない」と書いてくるようになった生徒

図6は、普段の学校生活に対して、とかくやる気の感じられない生徒の記述である。毎回の記述も素っ気ない感じのものが続いていた。夏休み後、学園祭も終わりいよいよ周囲が“受験モード”になってきたことを敏感に感じるようになったのか。大事なテストが続くようになったころから、「数学：テストがあまりできなかつた。」とか、「数学：内容が全く分かんなかつた。」等と、苦手な教科と授業が理解できずに困っている様子が正直に語られるようになった。「本人、『このままじゃ、マズい』と思い始めたのでしょね。」と言う、担任の先生が指摘する時期と重なっていたようだ。

今日、あまりがんばれなかった授業 教科名「数学」 理由	今日、あまりがんばれなかった授業 教科名「数学」 理由
テストが ありすぎた。	内容が全く わからなかった。
コメント 次にはいって!! しかも復習も!!	コメント あう! わからないまじでせう。 例えば友だちに聞く! とかしようね!

図6：「わからない」と訴える生徒の記述

### ③「勉強」に対する意欲が、まるでない生徒

授業中、他人にちょっかいを出しているか、机に伏せて居眠りをしていて、担当の先生に怒られているか、どちらかの生徒がいた。『振り返りノート』に対しても、やる気が感じられず、筆者もコメントに困るほどであった。ある時、その生徒が、その日「がんばった」と思う授業の様子を簡単な挿絵（図7、8参照）にして書いてくれた。非常に面白く、また様子を的確に表現した絵だったので、「絵が上手！様子がとってもよくわかるよ！」とコメントした。すると、その次の週から最終回まで「挿絵」を入れ続けてくれたのである。本人なりに受験のことも気になっているのか、10月の後半ぐらいから、少しずつではあるが、テストの結果や勉強についての記述も見られるようになった。

7月1日火曜日 天気	今日、一番がんばれた授業 教科名「数学」 理由
	某月某日テストでくうんはあったが、 一番勉強していた教科科はの じしんがもてがんばれた。(苦)
	コメント あばらしい!! 自分が勉強した!!、 " 思える 自信になれた!!

図7：ガッツポーズの「挿絵」の記述

10月22日木曜日 天気	今日、一番がんばれた授業 教科名「理科」 理由	今日、あまりがんばれなかった授業 教科名「英語」 理由
	中間テストがええよ!! 69点もした!!	どか! 早くして!!
	コメント 目標以上だったかな? 頑張ったね!!	コメント よめる... 宿 どか! 早くして!!

図8：続く「挿絵」記述

### (4)『振り返りノート』のコメントについて

堀・仙洞田・芦澤(2014)によると、生徒の記述に関してのコメントは、短く端的であり、かつ教師が何を言いたいのか、子どもが考える要素を含ませる方がよいとある。それを参考に、半年間の実践の中で研究を続けた。生徒が「がんばったとする授業に関しては、「すばらしい」、「すごいね」、「その調子でがんばろう」等、ほめたり励ましたりするようなひとことで返していることが圧倒的に多い。時に、授業の内容を詳しく聞くようなコメントを付けていた。一方、「がんばれなかった」とする授業に関しては、「次回がんばろう」や「どうしたの?」といったことば、また「授業がわからなかった」といった記述には、「わからないままにしないようにね」といったコメントを返していた。「コメントは、短く端的に。」ということに気をし過ぎてしまい、具体的に「どのように改善していけばよいか」という示唆的なコメントができていない。また、コメントのパターンにバリエーションがない。

本取組に関しては、週1回の実習でしかやりとりの機会がなかった。そのため、生徒の記述に対して、筆者がどこまでコメントしたらいいのか。学級担任、教科担任の先生方を通り越して、どの程度まで踏み込んでいいのか。と悩みながらの実践になった。来年度

は高校の現場に戻って、ある程度“遠慮”のない状態で実践を重ね、研究を深めたい。

## 6. 成果と課題

### (1) 「授業づくり」について

効果的な指導の在り方を探ったうえでの成果として、まず挙げられるのは、授業に対する筆者の「目」が変わったこと。公開授業や研究授業を参観していても、「ここは子どもたちに聞かないと。」とか、「もう少し聞き方を変えた方が、子どもたちが答えやすいのではないか。」と、「子どもたちを動かすためにどうするか」ということを、常に考える自分が存在する。また、問いを投げかけ、それに対する子どもたちの反応を「待つ」こと、「子どもたちの声を拾い、深めていく」ことを意識する姿勢が強くなった自分がある。これまで、いわゆる「講義」形式の授業が中心だった筆者にとって、これは画期的なことだといえる。高校では、投げかけた発問に対して、生徒から自主的に答えが返ってくることは滅多にない、と考えて授業をしていたが、今では、“この時間では何について考えればよいのか”を明確にし、答えやすい発問をしよう、子どもたちが返してくれた答えを拾って授業展開しよう、と考える筆者がいる。目指すは「子どもたちの顔が上がる授業」、「子どもたちが活躍する授業」である。その基本となる、「授業内のルールづくり」に始まり、子どもたちが「顔を上げ」、さらに「動く」ための仕掛けをどうつくるか。UD化に関しての「情報の絞り込み(焦点化)」や「さらなる板書の構造化・ワークシートの活用(視覚化)」、「“考えの共有”のための(話し合い)活動の実践(共有化)」等、高校現場で試してみたい方策は、山ほどある。

例えば、高校2年生の国語・「現代文」に『山月記』がある。その授業の中で、「主人公・李徴のつくった詩が、第一流の作品にならないのは、なぜか。」「李徴は、どうして“虎”に

なってしまったのか。」など、生徒も関心を示すであろう内容に「ねらい」を絞って「問い」を立て、生徒同士が「話し合い」をし、ワークシートを利用しながら考えを交流させ、「答え」に迫る。といった、今年度の実習で得た知見を、十分に活かした方策を試してみたい。その上で、高校現場に「取り入れられる」もの、「アレンジして取り入れる」もの、「馴染まない」ものを見極めていきたい。身体に染み付いてしまった「講義」形式の、いわゆる「一方通行」体質の改善をいかに行えるか。より意識し、繰り返し実践を重ねることが、生徒を学習に向かわせるための効果的な指導の体得につながるものとし、2年目の実践に向かいたい。

### (2) 『振り返りノート』について

『振り返りノート』については、普段高校生の様子を見ていると、学年が下がった中学生とはいえ、「一番多感な時期。正直なところを書いてくれるかどうか」と、疑心暗鬼で始めた取組であったが、意外に子どもたちは真摯に取り組んでくれ、時間を追うごとに本音が飛び出すようにもなった。生徒の記述に関して、コメントをするのが「担任の先生」ではなく、少々距離感のある、「外部の人間」だったから書きやすかった、ということもあるだろう。しかし、この『振り返りノート』を使っただけのやりとりが、生徒との人間関係を構築するための、重要なツールとなり得る実感を得た。半年の取り組みの終了後、12月にA中学校・3年のお二人の担任の先生方に、生徒たちの様子についての聞き取りを行った。その中で、「生徒の気持ちが学習に向かうと、A中学校独自で取り組んでいる『授業復習ノート』の記述も充実し出し、成績も少しずつ上がる。表情も明るくなり、教師との対応の仕方も変わってくる。」という話をうかがった。その時期が、『振り返りノート』の記述が変化する時期と、ほぼ一致する生徒もいる。そういった生徒の変容には、保護者の力も大きく

影響するともおっしゃっていた。生徒の学力の向上や学習に向かう姿勢の形成と、『振り返りノート』の記述の変化との相関関係は、今年度の研究では掴み切れず、課題も残るが、我々教師が、生徒が変わろうとする、そのきっかけをつかむタイミングを見取るための一つの手段として、この実践を続けてみたい。

この取組についての筆者最大の課題は、何といっても「有効的なコメント」の在り方である。特に生徒が「がんばれなかった」と、マイナスの気持ちをもって記述したものに対して、改善を促すようなコメントをすることがなかなかできない。「コメントはできるだけ簡潔に」ということに囚われ、コメントが固定化してしまう。いかに生徒を“その気”にさせられるようなコメントを付けられるか。生徒が「考える」要素を含んだ内容のコメントを付けられるか。教師側のコメントのおさえどころを、さらなる実践の中で研究を続けたい。

簡単ではあるがその日の授業での学習内容を書いてくれる生徒や、「何でもコーナー」でのやりとりが続くような生徒に対しては、学力向上のきっかけにつなげるツールとして有効なのではないか。また、「わからない」、「学習内容が難しくなってきた」と素直に書いてくれる生徒や、勉強についてはまるで関心がないが、それ以外のことに反応し、やりとりを続けてくれるような、いわゆる「気になる生徒」に対して、教師側との人間関係を構築するための、そして生徒からの SOS をキャッチするためのツールとなり得るのではないか。今年度の『振り返りノート』の取組から、先行研究ですでに述べられている、「自主的に学ぶ意欲の喚起」の効果とともに、その意欲の下支えとなる「人間関係づくり」のためのツールとしての可能性が見えてきた。授業が成り立つ最大の要件として、生徒と教師の良好な人間関係が大きく影響することは、間違いない。そこに安心や信頼があつてこそ、良

い授業が生まれる。『振り返りノート』が、自由記述可能な「何でもコーナー」も含めて、学習意欲喚起のための「安心・信頼」づくりの一助となるか。導入意義の課題等もあり、高校現場ではあまり為されていない取組のように思うが、その可能性を追求しながら、効果的な指導の在り方に結びつくよう、高校生を対象に実践、検証をしてみたい。

## 7. おわりに

前出の中教審答申に、「(高等学校における)学習・指導方法についても、言語活動の積極的な導入をはじめ、生徒が受け身でなく主体的・協働的に学ぶことを促す方法へと進化を図る」とあり、いよいよ高等学校教育についても、育成すべき資質・能力の観点から、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法(アクティブ・ラーニング)の拡充を図る方向へと、大きく舵を切ることが謳われた。本研究は、筆者の現場経験における悩みがきっかけとなったものだが、奇しくも、今回の答申の方向性と合致する部分がある。そういった視点からも、来年度高校現場に戻っての実践が、大いに有意義なものになるよう、研鑽を積みたいと考える。

## 8. 引用・参考文献

- ・中央教育審議会(2014)「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について ― すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために ― (答申)」(第177号) 文部科学省
- ・林 望(2012)「国語授業のユニバーサルデザイン授業」『指導と評価』日本教育評価研究会
- ・堀哲夫・仙洞篤男・芦澤稔也共著(2014)『自主学习ノートへの挑戦 自ら学ぶ力を育てるために』東洋館出版社
- ・文部科学省(2008)『高等学校学習指導要領』